THE Y'S MEN'S CLUB OF SAPPORO
CHATERED ON NOVEMBER 21,1955

2017年４月

札幌クラブ

c/o YMCA
MINAMI 11 NISHI 11
CUO-KU SAPPORO
〒064-0811
011(561)5217

The Service Club of YMCA
The International Association of Y's Men's Clubs

LT／リーダーシップトレーニング　Leadership Training

―　主　題　―

國際会長	「Our future Begins Today」	Joan Wilson (カナダ)
アジア会長	「Respect Y's Movement」	Tung Ming Hsiao（台湾）
東日本区理事	「明日に向かって　今日働こう」	利根川 恵子（川越）
北海道部部長	「視点を変えて見てみよう」	山本　雅之（十勝）
札幌クラブ会長	「親しくそして語り合う例会を」	宮崎　善昭（札幌）

札幌クラブ役員

会　長	宮崎　善昭
副会長	伏木　康
書　記	中田　千鶴
会　計	秋葉　聡志
直前会長	宮崎　善昭

今月の聖句

兄弟としていつも愛し合いなさい。旅人をもてなすことを忘れてはいけません。そうすることで、ある人たちは、気づかずに天使たちをもてなしました。自分も一緒に捕らわれているつもりで、牢に捕らわれている人たちを思いやり、また自分も体をもって生きているのですから、虐待されている人たち汝ことを思いやりなさい。　　ヘブライ人への手紙　13 章 1～3 節

はるかな昔 遠い国　中田 千鶴

１９８５年６月、私たち１家はイギリスのオックスフォードにいました。７月と８月、オックスフォードは空になります。待ちに待ったホリデーです。夫婦でやっているなじみの食料品店も店を閉めてホリデーに出かけます。

イギリス英語では holiday は「１日の休日」ではありま数か月の長い「休暇」を意味します。

文化の違いです。どんなに忙しい職場でも「ホリデー」と言うと皆納得するそうです。日本なら「この忙しい時に、休暇をとるとは何を考えているんだ！」と勤務評定ゼロになるところです。学校でも子供たちが家族のホリデーで欠席するのを喜んで許可します。イギリスでは休暇は本当に「神聖な」権利なのです。ですから、毎年ホリデーから帰るとすぐ来年のホリデーはどこに行くかという話題で盛り上がります。イギリスの冬は暗い。冬の数ヶ月、娘たちは真っ暗な中、小学校に行きます、家へ帰る頃はもう薄暗くなっています。あの冬を経験しなければ、南の灼熱の太陽を恋い焦がれる北欧人の気持ちは分かりません。夏、キャンパスの芝生で水着姿で日光浴をしている学生の姿を見ることも珍しくありません。

主人の同僚のＡ教授はスペインの大学教授と２か月の間、家ごと交換して家族でスペインへ。Ｂ助教授は「今年はイタリアだ」と張り切っています。わが家は自動車でキャンプ旅行をすることに決め、テントを買い込み、愛車フォード・アングリアの屋根に積みこんで、オックスフォードのわが家を出発しました。テントと言っても登山用の三角の小さなテントではありません。パイプの柱があり、中は２部屋に分かれている立派なハウス・テントです。ヨーロッパはどこの国へ行ってもオートキャンプ場が完備しています。テントを張る場所だけでなく、ショップ、食堂、シャワー、時にはダンスホールまで備えているので安心です。

思い出は尽きませんが、自動車旅行をしている人は仲間意識があるのか、すぐに仲良くなります。みんな本当に親切です。ベルギーでテントを張って〈建てて と言うべきでしょうが〉街へ行って、帰ってみるとなんとわが家のテントがありません！吃驚していると隣のテントから老夫婦が出てきて「にわか雨が降ってきてあんたのテントが水びたしになったから高いところに移してあげたよ」と言うのです。テントを張った場所が窪地だったのです。

当時ヨーロッパにいる日本人は皆、政府の役人か。大企業の企業戦士で、一般の日本人の旅行者などいませんでした。ドイツで「子供を連れて自動車旅行をしている日本人がいる」というので新聞記者の取材を受けたのには驚きました。地方紙ですが記事になったようです。どこへ行っても写真をバチバチ撮られたのは娘たちでした。

ドイツのシュバルツバルト（黒い森）も忘れられません。農家の牧場の一部に作ったオート。キャンプ場の中にテントを張りました。朝、首に大きなカウベルをぶら下げた牛がガランガランと大きな音を立て

p.6 左上へ続く。

２０１７年３月例会　在籍会員　１１名　例会出席　８名　メネット　０名　メーキアップ　０名
出席報告　ゲスト　１名　ビジター　０名　計　９名　出席率　７２％

札幌ワイズメンズクラブ
２０１７年４月例会

日時　2017 年 4 月 18 日（火）18:30～20:30
会場　北海道 YMCA
　　札幌市中央区南 11 条西 11 丁目 1-2
　　Tel. 011-561-5642
会費　1,000 円

プログラム

司会　秋葉　聡志
① 開会点鐘　　札幌クラブ会長　宮﨑　善昭
② ワイズソング･ワイズの信条　　全　員
③ 聖句　　宮﨑　善昭
④ 開会挨拶　　札幌クラブ会長　宮﨑　善昭
⑤ 誕生日　　なし

結婚記念日

４月９日　伏木　康、恵美子夫妻
４月15日　小野健・エリナ夫妻
４月16日　中田靖泰・千鶴夫妻
４月29日　柴田伸俊・邦子夫妻

⑥ 卓話

見にいく 会いに行く
～ 瀋陽・大連・旅順 ～

義村　小夜子ワイズ
札幌北ワイズメンズクラブ

⑦ 諸報告
⑧ YMCA報告　　担当主事　佐藤　雅一
⑨ みんなで歌おう

水師営の会見

（旅順開城 約なりて・・・）

写真上：　昨日の敵は今日の友　乃木大将とステッセル

⑩ 閉会挨拶　札幌クラブ会長　宮﨑　善昭

札幌ワイズメンズクラブ３月例会

日　時：2017 年 3 月 21 日（火）18:30～20:30
場　所：クラッセホテル札幌
参加者：秋葉、佐藤、中田靖、中田千、伏木、安田、宮﨑、柳沼、
　ゲスト：下山周作氏（卓話者）　　計　８名

年度末で業務多忙のため欠席の会員があり、少人数の例会となりました。卓話者は元道新の記者で今コラムニストとして活躍している下山周作氏。戦後の六大学、プロ野球全盛期から 50 年にわたるスポーツ界の裏表を縦横に鋭くえぐる辛口の語りで聴衆を魅了してくれました。（詳細は p.4～５参照。）

特に印象に残ったのは、「今の笛太鼓の鳴り物入りの応援はスポーツとしては邪道だ。テレビ、ラジオの解説者もあんなのは解説ではなくて単なるファンへの迎合に過ぎない。オリンピックのメダル至上主義にしてもスポーツの王道を踏み外している」という指摘は耳に痛かった。最後は慶応卒の下山氏に敬意を表して「若き血（陸の王者）」を全員で熱唱しました。（歌えない会員もいましたが。）「紺碧の空」もやろうという声もありましたが、残念ながら早稲田ＯＢがいなかったので実現しませんでした。

写真上：　前列左から、中田靖、宮﨑, 下山、安田
後列左から、秋葉、伏木、佐藤、柳沼、中田千

札幌ワイズメンズクラブ３月事務会

日　時：2017 年 3 月 28 日（火）19:00～20:00
場　所：北海道ＹＭＣＡ　総主事室
参加者：秋葉、佐藤、柴田、中田千、伏木、宮﨑

１．　４月例会卓話に予定していた盲導犬の方が来れないことになった。札幌北クラブの義村小夜子ワイズに中国、満州訪問の話をお願いする。
２．　この１０数年、中田書記の友人の好意により彼女が経営するクラッセホテル札幌を無料で例会場として使用させて頂いてきたが、ホテル業界も経営が厳しくなり、いつまでも好意に甘えていることは出来ないので、４月から例会場を北海道ＹＭＣＡに移すこととした。
３．　４月２２日（土）に行われる「北海道部第２回評議会・次期役員研修会」への出席を各会員に確認する。
　　現在の出席予定者：　秋葉、川上、佐藤、柴田、中田千、中田靖、伏木、宮﨑、安田、柳沼

時計台コンサート　愛と平和を　Part Ⅱ

３月５日、今年度２回目の「時計台コンサート」を開きままました。テーマは前回の「愛と平和を」を継承しました。ようやく雪が溶け、アスファルトも顔をのぞかせてきました。春を待ちわびていた文子ファン、ショパンファンが三々五々時計台コンサートに集まってきました。

共演の黒柳真理さんが安田文子さんのピアノ伴奏でカッチーニの「アヴェ・マリア」を舞う予定でしたが黒柳さんの脚の具合が悪く上半身だけの踊りになったのは残念でした。

第２部の「安田文子の ピアノ コンサート」では、ノクターン、英雄ポロネーズと続き、半年ぶりにショパンの世界、安田文子の世界に酔いしれました。

画期的だったのは、聴覚障がいの方々が多く来場され、「ふくいんの手」の方々のご協力で手話通訳を提供出来たことでした。１０年ほど前、北海道ＹＭＣＡがレーナ・マリアをお呼びしてコンサートを開いた沖以来の「手話通訳付きのコンサート」で大好評でした。

今後も障がい者の方々への配慮を忘れないコンサートを続けていきたいと思います。

写真左端：　曲を弾く前、合間に曲の開設、ポーランドの思い出などを語る安田文子会員。演奏はもちろんこの語りも好評です。
写真左中央：　黒柳真理子さんは足を痛めて「アベマリア」を踊ることはできませんでしたが上半身だけで上官溢れるる演技を披露。

フットサル大会支援

２月 26 日（日）、北海道 YMCA フットサル大会が行われました。札幌ワイズはいつもの通り「ワイズ・コーヒーショップ」を開店しました。

参加者全員にスポーツドリンクを配り、さらに無料ホットコーヒー、アイスコーヒー、キャンデーを用意し、子供たちを支援しました。

寒い冬でしたがアイスコーヒーの方が人気でした。外は零下でもプール棟は真夏だからでしょうか？

写真上：　年少組の大激戦。強烈なシュートをキー㊐さーがナイスキャッチ。

写真左：　試合開始前、朝早くからワイズ・ドリンクコーナーの開店準備をする柴田会員と秋葉会員。このほかに佐藤会員、カメラの後ろに中田会員がいます。

第 2 回評議会・次期役員研修会

北海道部第２回評議会、次期役員研修会が開かれます。次期役員予定者でない方々も万障お繰り合わせの上ご出席下さい。

記；

日時：　４月 22 日（土）　登録受付　12：00
　評議会　13：30 ～
　研修会　15：15 ～
　懇親会　17：00 ～ 19：30
場所：　東京ドームホテル札幌（大通西８丁目）
会費：　8,500 円
　（評議会・研修会のみの出席者：　2,000 円）
　ホストクラブ：札幌北ワイズメンズクラブ

ワイズメンズクラブ国際協会

第２０回　東日本区大会

日時：　**２０１７年６月３日（土）～４日（日）**
会場：　**ウエスタ川越**

江戸のおもかげを残す川越
これまでの20年　温故知新
明日に向かって新しい出会いを

スポーツ夜話　～今は昔～

元北海道新聞スポーツ記者・コラムニスト　下山周作

生まれも育ちも関東州の大連市。関東州といっても戦後70年余も経った今日、まして遠く離れた北海道の方には馴染がないのも当然。満洲は傀儡国とはいえ、独立した国家だが、関東州は永久租借地でれっきとした日本国の一部だった。戦前の地誌では、人口順では東京、大阪、名古屋、京都、横浜、神戸の６大都市に次いで、京城（ソウル）に次ぐ８番目の都会で、当時の連合艦隊の全艦艇が入れるという広大な不凍港だ。都市対抗野球で、大連満洲クラブ（第１、３回）大連実業クラブ（第２回）の関東州代表が３連覇したくらいの野球狂のマチでもあった。標準時子午線より約14度西にあって、１年中夏時間みたいな街で、４時ころから試合開始できることと、プロ野球のない時代に大学野球の好選手が高給で迎えられたという背景も無視できない。

小学校の近くの中央公園内に、両クラブの専用球場があり、入学祝がグローブで、３年生のころには実業球場の通年パスも父から譲り受けていたから、放課後にスコアブック片手に球場に行けたのは、スポーツ記者としての素養を培うことだ出来たと、感謝している。昭和16年夏には満洲国建国10周年を記念して、まだ内地では人気が無かったプロ野球の公式戦も来て日参した。お蔭で一度戦地から帰ってきていた巨人の沢村投手や、蛸足といわれたイーグルスの中河一塁手の妙技どころか、急遽リリーフ立って多投した、当時は珍しかったナックルを目撃するなど、数多くの貴重な体験をしたのは、この年代としては稀有なことだった。３年生くらいで毎月の雑誌が「少年倶楽部」を卒業して「野球界」になっていた。プロより六大学が大半を占めていた。後年、後楽園の記者席で、元六大学とプロ野球で活躍した大先輩に「お前、若いのによく知っているな」と驚かれたものだ。

満洲国への玄関口。日清戦争結果手にした遼東半島の突端の大連を、不凍港が喉から手が出るほど欲しい帝政ロシアが仏、独と組んだ『三国干渉』で横取りしたものの、日露戦争で隣の旅順が再び戦場になる。私の小学校時代の遠足と言えば、旅順や金州の古戦場ばかりだった。子供の私たちには遠い昔の話のように思っていたが、因縁の地が我が手に戻ってから私が生まれるまで僅か25年しか経っていない。太平洋戦争の25年後といえば1945年、東大講堂や浅間山荘事件など70年安保闘争の真っ盛りだ。かく言う自分も栗山支局長で、長沼ミサイル基地建設を巡って、道内初の機動隊対全学連や農民組織の熾烈な闘争に追いまくられていた。世の移り変わりは速い。

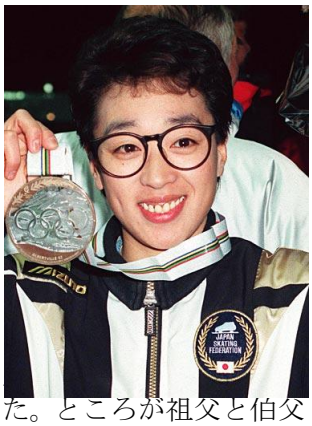
戦後の大連はいち早くソ連軍が入ってきた。悪しき因縁と言うべきか。ソ連軍の占領で満洲中が浴びた国共内戦の戦禍からはまのがれたが、戦時中に私の家も父と兄が召集されたように、マチは女子供ばかり。なぜか日本政府は満洲や中国本土、南方からの復員、引揚は始めても関東州には音信途絶状態。とにかく収入の道がない。売り食いといっても中国人の買手市場だし、ソ連軍政部が軍票を乱発してインフレは進む。内地がどうなっているかわからないまま、我が家はソ連軍に接収される。今思えば母と姉を抱えて、どう生き延びたか不思議なくらい。全市挙げてそんな調子なのに、自分たちで学校を継続したのも日本人ならではか。ようやく昭和21年末に国と連絡がついて、市民が言う『空白の６百日』が解消した。私が帰国というより親の故郷に来たのは翌年の３月だった。

雪の少ない冬の大連はスケートのマチ。そのせいでもないが、大学では自然にスケート部。故郷を亡くした私が北海道を志向したのも必然だった。幸い道新に入社、２年目には念願の運動部へ、５年目に大阪勤務となる。甲子園はいまでは想像もつかぬほど荒れ果てていたがトラ狂は健在だった。贔屓の阪神にもミスには厳しい野次を飛ばすが、高校球児には心温かい紳士に豹変する。弱い、遠い学校を熱狂的に応援する。ある大会で北海高が開会式直後に、本土復帰前で弱かった沖縄代表と対戦。他校の監督に「北海サンがいやな二つを全部引き受けてくれた」と感謝されて苦笑していた。だから波商の尾崎や法政二の柴田なども、ヒーロー扱いしなかった。球場を出る選手たち動けないほど取り囲むのを始めて目撃したのは、37年のセンバツ準決勝を９回２死から投手の逆転さよならランニング本塁打で早実を破った北海ナインだった。三沢の太田が甲子園アイドルのはしりと思うが、それから50年。徐々に野球観戦の質が変わっていったのも仕方あるまい。

大阪転勤は夏の甲子園直前で、その年のセンバツ優勝投手の王貞治を始めて見た。投手としては並だったが、打者としては非凡で、翌春にはさらに進歩していて「大下以来の左打者」と、後年まで辛口で鳴らした私が激賞したのを思い出す。翌昭和33年は長嶋茂雄がプロ入り。巨人のキャンプ地は明石だったから、何度か取材に通った。これがプロ野球記者としてのＯＮとの出会いの始まりだった。といっても、私は三原さん流の「グラウンドの上でしか評価しない」派だったから、取材以外の会話はしたことが無い。在坂２年足らずで東京へ。東京支社のスポーツ担当は３～４人で大相撲から首都圏のプロ野球、東京六大学、東都大学野球、プロボクシングのタイトル戦、大学ラグビーを全面取材したのだから、文字通り寝る間も惜しむ毎日。息子が小学校に入ったら、日曜の午前中以外は顔を合わせられない。一つ家にいながら、交換日誌を交わす毎日だった。みな好きでやっている仕事だから、誰も弱音を吐かなかったし、毎日が楽しかった。東京は８年で北海道へ。

この時期は東京オリンピックを挟んで、プロ・アマとも全盛期でもあった。スポーツの本質は言うまでもなく勝敗を争うことである。そして勝者はたった１人・１チームだ。「優勝しなければ２位も最下位も同じだ」とは、常に下位球団にいながら抜群の力量で勝ち星を積み重ねた４百勝投手の金田正一だ。『優勝』の２字の誘惑に負けて、移籍の自由の権利を何度目かに行使して巨人に入った。念願の優勝投手となって日本シリーズのマウンドに立った金田は記者席から見ても分かるほど顔面蒼白、足も震えているのでは―と思うほど緊張の極致にいた。１球投げたあとは徐々に平常心に返って、見事勝投手になったが、あの異常な緊張こそ、優勝に慣れたチームメイトに、その価値の大きさを改めて教えるものだった。そのたった一つのために、日ごろから切磋琢磨する選手たちが試合に臨んで受ける重圧も半端ではない。そこで如何にリラックスするかが重要で、それを選手たちは「楽しもう」と思うことで和らげる。

かつてスピードスケートで一世を風靡した橋本聖子は、ここ一番に力が入って記録を伸ばせない時期があった。ある大会で見かねた私は聖子を呼んで「頑張ろうとする気持ちを我慢しなくては」と忠告した。我慢するという言葉が、苦悩する聖子には納得し易かったらしい。以後の聖子はアップ中に遠くから私の顔を見ると、口の形で「我慢」と言って微笑んだものだ。



以後「頑張るより我慢する」が流行し、ところが祖父と伯父が元、現ＩＯＣ委員の某評論家がＴＶで「お前らを楽しませるために金を出しているのではない」と言い切った。この金主気取りに思わず吐き気がした。

今や我国も国を挙げてスポーツを国威発揚の場にしようと、まさに官民一体になって邁進している。スポーツ界もこれに慣れっこになって、もっと強化費や遠征費が欲しいと、タカリ体質を丸出しにしつつある。本当にこれで良いのか。50 年以上前に、日本ハムの前身・東映の大川オーナーが語った「金は出すが口は出さない」との明言が、今こそ思い起こさねばなるまい。この言葉が如何に実行困難かはこの半世紀の歴史が教えてくれる。

スポーツ庁の設立は歓迎すべきだが、国家権力のスポーツ支配の具になるなら、スポーツは腐敗の道にまっしぐらだ。以前ある本に「選手は国の栄光を賭けて戦っているが、国家の名誉のために戦っているのではない。国と国家がどう違うか。長くなるので止めるが」と書いた。私流では、国とはこの美しいふる里とそこに暮らす人びとであり、国家とは庶民を支配する強権力である。スポーツを国威発揚の道具にすれば、ロシアのように国家ぐるみでドーピングに走るのは必然で、ドーピングは手を変え品を変えて半永久的に続くだろうし、反ドーピングとの熾烈な戦いはこれまた半永久的に続くだろう。

担当記者としてプロ野球は千試合ほど取材しただろうか。定年退職して野球観戦とは無縁になった。今から十数年前だろうか、息子から札幌ドームの切符を貰った。対西武戦で、話題の松坂大輔の登板予定とあって、喜んで出かけた。ところが球場内は私の住んでいたのとは別世界だった。歌声や歓声が途切れなく続くし、メガホンで座席の背を乱打される。あの懐かしい投手が投げる球がミットをたたく快音も聞こえない。周りは野球観戦と言うより、単にチームの勝ちと贔屓選手の活躍を願う応援者ばかり。そこには野球の醍醐味など味わえない、というより味あわせてくれない場所だった。数年後、今度は息子と一緒に行ったが、程度は酷くなるばかり。もう２度と行くまいと誓った。もうＴＶ観戦しかない―と思ったら大間違い。アナウンサーは絶叫型だし、解説者も応援団丸出しの者が人気があるらしい。もはやＴＶも消音状態で見る以外、住む場所がない。時代遅れと言われても仕方ない。本当のスポーツは何処へ行ったか。いや幸い世界では残っている。今のお祭り騒ぎは欧州中心だったサッカーの影響だろうが、米大リーグの中継を見ると、まだそこには『球音』の聞こえる世界が残っていた。世界は広い。そして捨てたものでもない。

オリンピックと言うと今のマスメディアはメダル好きの度を起こして、メダル狂に堕している。獲得したメダルの数を競うように、今日は何個獲ったと狂奔し、優勝しても「金メダルです」と叫ぶ。理論的に言えば、男子体操競技なら一人で８個のメダルを獲得できるが、野球やサッカーなど団体競技は各人には与えるがメダル数としては１だ。

ある時たまりかねて、お節介と思ったが、運動部長に「個人競技と団体競技をゴッチャにした統計なんて無意味だから載せない方が良いのでは」と電話したら「それでは読者が承知しません」―。

私は常々『選手を育てるのはファンで、ファンを育てるのはマスコミ』と言ってきた。今の国威発揚型スポーツを真の姿に戻すにはマスコミに尋常ではない覚悟が必要だ。今の「選手に迎合するのはファン、ファンに迎合するのがマスコミ」ではスポーツの正常化は「百年河清を待つ」に等しい。　だからと言ってこのままで良いはずは無い。まずは一人ひとりの力は小さくても、国威発揚型から庶民主役型の世界に変える地道な努力をすることだ。「雨垂れ石を穿つ」と言う。諦めずに頑張ろう。

下山周作氏
慶応大学卒。北海道新聞で活躍。今もコラムニストとして健筆を振るう。

YMCAニュース　担当主事　佐藤雅一

②　チャリティーラン２０１６

５月１４日（日）、第２２回北海道ＹＭＣＡインターナショナル・チャリティーラン２０１６が行われます。現在参加チームを募集中です。是非お知り合いの方にご紹介いただき、参加チームの募集にご協力下さい。

③　ボランティアリーダー募集中

新年度を迎えボランティアリーダー達も新しい仲間を迎える活動を始めています。ボランティアリーダー募集のチラシを作成し、大学の入学式をめがけて会場前で配布を行っています。

札幌には、アウトドアクラブ、サマーキャンプ、チャイルドケアー、スキースクールなどで多くの学生が活動している他にも、発達障害の子供達を対象としたグループ活動、障害児水泳クラスでは社会人・主婦の方も沢山活動しています。是非多くの方にご紹介下さい。

④　全道職員研修会

４月２９日－４月３０日の１泊２日で全道の職員が集まり大雪青少年交流の家で研修会を行います。

今回のテーマは「ファンドレイジングを通した事業の再確認」、佐藤ゆみ子さん（日本ファンドレイジング協会　準ファンドレイザー）を講師に迎え、ファンドレイジングに関する基礎理解を通じて自分たちの事業が持っている魅力を再発見すると共に、効果的な発信方法を学び、１２０周年記念事業の実施に役立てていきます。

④新職員紹介

４月から新しい職員が加わりました。

ウエルネスセンター	高橋　芽久
チャイルドケアンター	工藤　　綾
北見	金子　昌平　入倉　香苗
とかち帯広	紺野亜衣美　高田　怜史

⑤全道職員研修会

４月２９日－４月３０日の１泊２日で全道の職員が集まり大雪青少年交流の家で研修会を行います。今回のテーマは「ファンドレイジングを通した事業の再確認」、佐藤ゆみ子さん（日本ファンドレイジング協会　準ファンドレイザー）を講師に迎え、ファンドレイジングに関する基礎理解を通じて自分たちの事業が持っている魅力を再発見すると共に、効果的な発信方法を学び、１２０周年記念事業の実施に役立てていきます。

①　新職員紹介

４月から新しい職員が加わりました。

ウエルネスセンター	高橋　芽久
チャイルドケアンター	工藤　　綾
北見	金子　昌平
	入倉　香苗
とかち帯広	紺野亜衣美
	高田　怜史

巻頭言　遙かな昔　遠い国　　中田千鶴　　p.1 より続く

て私たちを起こしに来てくれます。娘たちが大家さんの農家まで走って行って牛乳と焼きたてのパンを買ってきて（分けてもらって）朝食です。あの地方の農家は飛騨の合掌づくりや南部の曲がり家を思わせる造りです。１階に牛や羊がいて、２階に人間が住んでいるのです。シュバルツバルトでは大幅に予定を延長して滞在しました。テントをたたんで、出発するときは、涙の別れではありませんが、後ろ髪をひかれる思いでした。あれが本当のホリデーだと思います。

自動車旅行のよさは、好きな所へすぐ行けること、名所旧跡を見るだけでなく、その地の普通の人々と同じ生活が出来ることです。地元のお店に入り、お店の人々と話し、地元の人々と同じものを食べていると、観光ガイドには書いていないその国に接することが出来ます。国境を超えると空気までが変わるような気がします。フランスに入った時の、パンの美味しさは今でも忘れられません。

本当にいろんな人に出会いました。定年になってキャンプ旅行をしているのだという夫婦。小さな赤ちゃん連れの夫婦に会いました。出産１週間後というのには驚きました。ハワイから来たという日系アメリカ人のご夫婦も忘れられません。このご夫婦はテントではなくキャンピングカーでヨーロッパじゅうを回っておらました。イギリスではキャラバンカーと言います。車の中にキッチン、冷蔵庫、トイレ、天井にベッド、などすべて備えたすぐれものです。

私たちもいつかまたキャラバンカーでヨーロッパをきままに放浪してみたいと願っているうちに 50 年経ってしまいました。　旗を持ったガイドさんの後をついて免税店回りをさせられる度に、あの若かった日、幼なかった娘たちを連れてのヨーロッパのテント旅行を懐かしく思い出すのです。

何故 この聖句を？

「ヘブライ人への手紙」の有名な一節です。トランプ大統領やルペン候補はどんな思いでこの箇所を読んでいるのでしょう。キリスト教界も、いやキリスト教界の一部が最も熱心な「おれおれファースト」の信奉者です。すべてのキリスト教徒が素直な気持ちでこの箇所を読めば今の世界の危機は一日で解決すると思うのですが。

ワイズの信条

1. 自分を愛するように、隣人を愛そう。
2. 青少年のためにＹＭＣＡに尽くそう。
3. 世界的視野をもって、国際親善をはかろう。
4. 義務を果たしてこそ、
   権利が生ずることを悟ろう。
5. 会合には出席治一、
   社会には奉仕第一を旨としよう。